

# 芝地域を考える

## —愛宕山・増上寺・芝神明—

石 山 秀 和\*

はじめに

1. 芝地域の範囲—地名の由来と住空間—
2. 芝地域の歴史の変遷—愛宕山・増上寺・芝神明—
3. 盛り場としての芝地域—芝を訪れた人々の記録から—  
おわりに

キーワード 芝 愛宕山 増上寺 芝神明 盛り場

### はじめに

江戸東京博物館都市歴史研究室では、これまでに日本橋や両国などの特定地域を対象としてシンポジウムを開催してきた。近年では、当館の位置する両国地域に焦点をあてて、地域の持つさまざまな特徴について、資料館、図書館、博物館など研究者間における協業のもと、多くの研究成果を得ることができたといえる<sup>1)</sup>。

本年度のシンポジウムでは、芝地域に焦点をあてて、特に「盛り場」としての視点から地域の特色を考察したい。以下、シンポジウムの目的と方法について述べる。

#### ①目的 盛り場としての芝地域の特質

都市江戸には両国や浅草など、数多くの盛り場が成立していたが、本シンポジウムでは①芝地域の地域的な特質の解明をめざし、②芝地域が江戸時代から明治時代へと移り変わる中で、どのように変容していくのかを、盛り場の連続と断絶面を通じて検討する。

#### ②方法としての盛り場

盛り場は都市江戸もしくは東京を考察する上で欠かすことの出来ない構成要素であることは言うまでもないが、特に江戸の盛り場研究についてみれば、浅草・両国を中心にして考察されてきたのに対し、それ以外の盛り場はどうだったのか、その具体像を含めてこれまで十分な考察があまりなされていなかったように思える<sup>2)</sup>。そこで盛り場の定義あるいは盛り場を盛り場たらしめている要因などに踏み込ん

---

\*東京都江戸東京博物館学芸員

だ地域研究の事例として今回のシンポジウムを位置づけた。本報告書はこのシンポジウムの成果をまとめたものであり、内容については各稿に委ねるが、ここではシンポジウムの対象地域となった芝地域について概観する。

## 1. 芝地域の範囲—地名の由来と住空間—

芝という地名は、古くは文明18年（1486）の『廻国雑記』に「芝の浦」という記述にみられるが、治安元年（1021）に著されたとされる『更級日記』にも「竹柴」という表記がみられ、江戸時代以前より人びとに呼称されていたことが知られる。<sup>3)</sup>

また、芝地域については、文政12年（1829）に編纂された『御府内備考』（資料1）には次のように記されている。<sup>4)</sup>（傍線引用者、以下同。）

### 資料1

増上寺の表門、芝に出たれば芝の増上寺と称するより、切通シ、土器町辺までも芝と唱ふ

芝地域は、江戸時代の初めより寺社と武家屋敷の占める割合が大きく、なかでも芝という地名との関連で言えば、増上寺の建立により「芝」と呼称される地域が拡大していったとされている。これを契機として、江戸時代を通じて徐々に「芝」を冠する地名が、東海道沿いを中心に広がっていったと考えられるが、引き続き『御府内備考』（資料2）をみてみたい。

### 資料2

（前略）此比芝といへるは金杉・本芝辺のみとおもわれたり、今の芝口町は、始日比谷の代地ニ賜はりて日比谷町と称せしを、宝永年中芝口御門を建させられし比より芝口町と改名せらるゝよしなれば、それより前は何れに属せし地なる事を知べからず、神明町の辺は飯倉ニ属せしにや、飯倉神明などゝも称せり、今は芝口町以南、上高輪町〈芝田町・芝車町・芝二本榎・芝伊皿子町と分ち唱ふ〉車町までをおしなへて芝といひ又増上寺の表門、芝に出たれば芝の増上寺と称するより、切通シ、土器町辺までも芝と唱ふれど、（以下略）

東海道の外堀にかかる芝口橋（新橋）以南から高輪辺りの広域な地域を総称して、「芝」と呼んでいたことがわかるが、本来は本芝・金杉辺、すなわち「芝浜」と呼ばれていた地域一帯を「芝」と呼んでいたと推定している。

## 2. 芝地域の歴史的変遷—愛宕山・増上寺・芝神明—

芝地域は増上寺の造営とともに、大きく変容していったことが『御府内備考』の記述から推察されるが、次に増上寺をはじめとした周辺社寺の沿革について述べる。

将軍家の菩提寺ともなった三縁山増上寺の創建年代は詳らかではないが、はじめ真言宗の光明寺（武州江府の貝塚の台）と呼ばれ、僧侶西誉により明徳4年（1393）に増上寺と号するようになった。中興開基源誉の時、徳川一門の菩提寺として慶長3年（1598）8月に日比谷の地より現在地に移転した<sup>5)</sup>。

『江戸名所図会』や『東都歳事記』によれば、境内地には将軍家の廟所、五重塔のほか、黒本尊堂、開山堂などがあり、三解脱門は正月や7月16日などに登楼することができ、多くの人びとで賑わったとされている。

芝神明も麻布飯倉（諸説あるが）より慶長年間に飯倉より現在地へ移転してきたとされており、東海道沿いの門前町とともに江戸有数の盛り場として多くの人びとが訪れる場所となっている<sup>6)</sup>。境内では開帳、宮地芝居、揚弓場、富くじ興行などがおこなわれ、門前には江戸土産ともなった錦絵を販売する本屋（文政7年刊の『江戸買物独案内』には書物問屋3軒、地本問屋4軒）もあった。

このほかに江戸名所として欠かすことができない場所として、愛宕神社がある。家康による慶長8年（1603）の創建以来、火防の神として多くの人びとの信仰を集め、江戸市中を見渡す絶好の景勝地としても知られている。いずれも、都市江戸の拡大によって、江戸時代の初期より東海道沿いに展開した名所という共通点を見出すことができる。これらの名所を中心にどのような特色を持つ盛り場が生まれていったのが考察すべき一つの課題となろう。

## 3. 盛り場としての芝地域—芝を訪れた人々の記録から—

これまでも盛り場研究は、歴史学、民俗学、社会学、地理学、人類学など、さまざまな領域で研究成果がみられてきたが、江戸東京の歴史と文化という視点に立ち、盛り場について直接言及した代表的な研究に、①陣内秀信『東京の空間人類学』<sup>7)</sup>、②吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー』<sup>8)</sup>、③竹内誠『江戸盛り場・考』<sup>9)</sup>がある。

なかでも、陣内氏は、盛り場について「神田明神、湯島天神、寛永寺、赤城神社、市ヶ谷八幡宮、日枝山王、芝神明、増上寺といった台地の突端にあり、町人地との境をなすエッジの部分に成立した一群がある。また一方で、深川八幡宮、回向院、浅草寺のような本来水辺の聖なるイメージと結びついて成立した宗教空間の登場したものも多い」、「都市の拡大・発展とともに、江戸市民にとっての文化的、遊興的空間は、政治・経済の中核、さらには日常の生活空間から離れて、自然と接する解放感に溢れた都市の周縁にもっぱら形成された」などとして、芝地域を江戸の盛り場の一つとして取り上げた先駆的な研究として注目される。

また、吉見氏は、盛り場を「飲食店・商店・娯楽施設等が集中し、恒常的に多数の人びとが集まる地

域として、商店街や繁華街、あるいは歓楽街とほぼ同様の意味」とし、さらに「盛（サカリ）」という語義より、エネルギーの高い、あるいは人びとが高揚した状態（集合的心性）にある場を盛り場と位置づけ、盛り場＝〈出来事〉として捉える研究視点を提示した。

歴史学の立場からでは、竹内氏が、「信仰空間と娯楽空間、聖と俗とが併存するところに、盛り場のもっとも盛り場らしい特色があった」とし、さらに「盛り場は、祭礼とか縁日とか月見や花見などのような年中行事としての特定の日にのみ賑わうのではなく、恒常的に毎日、大勢の人びとが集まる場所である」としている。

図1をみると、陣内氏の述べるように増上寺周辺に盛り場の要素が集中していることがわかる。つぎに、この地域を訪れた人びとの記録から当時の様相をみてみたい。

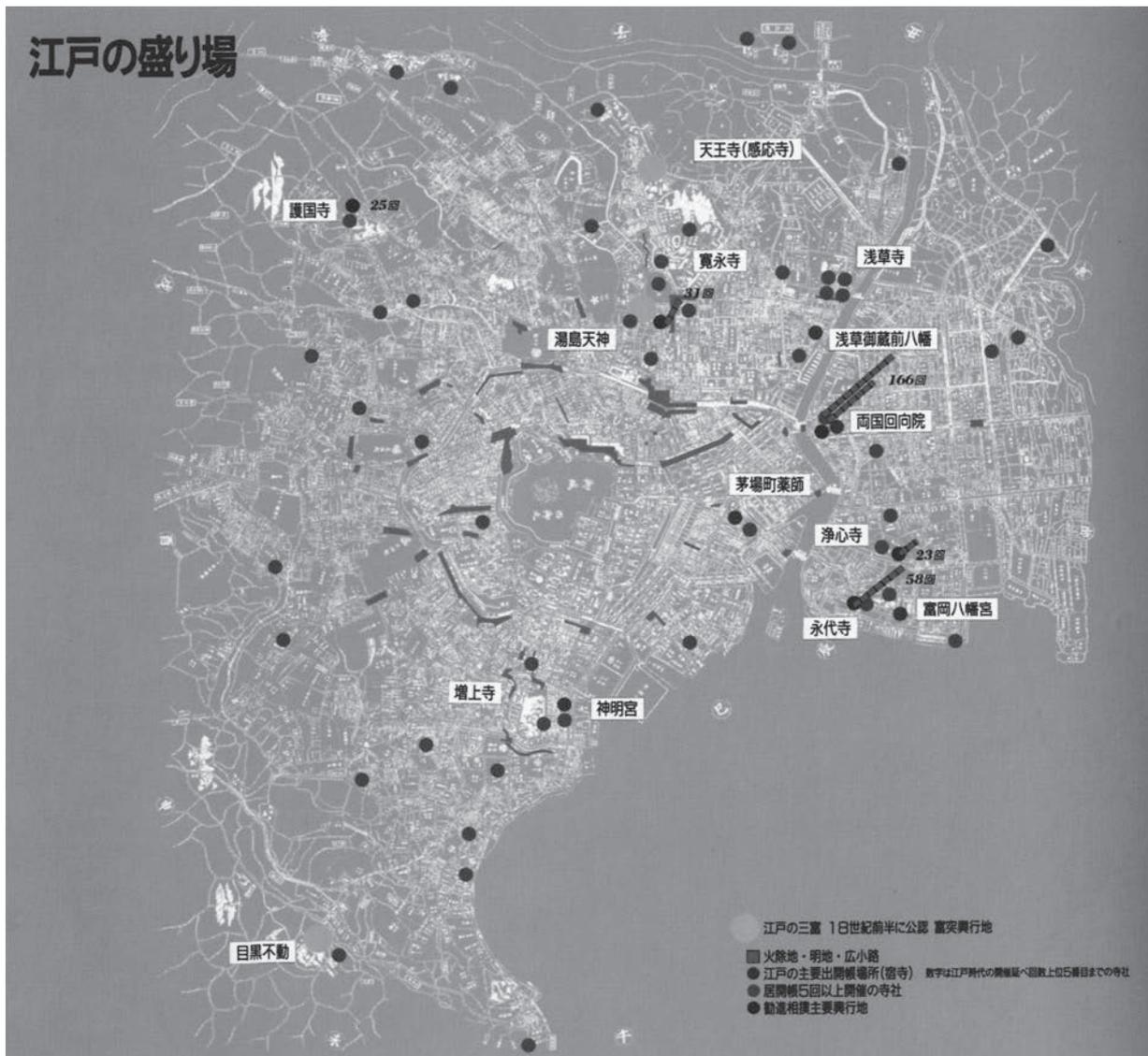


図1 江戸の盛り場（江戸東京博物館『図表でみる江戸・東京の世界』より）

## 資料3

- 一、武城芝神明は、増上寺の東に隣りて三島町にあり、宮は東に向ひて社内常に賑やかに頗る都会の土地たり (中略)
- 一、当社例年九月一日より二十一日まで例祭ありて、神明の生姜市と流言す、(中略)
- 一、生姜を夥しく持出しひさぐ事は、(中略) されば此市の間都鄙の男女山をなして群集し、軒ならびの茶店にも膝を容る場席もなく、(以下略)

## 資料4

(前略) 九月十一日より十五日迄祭礼のよし承りしも、九月の月に入るや、社内に見世物、曲馬、力持などの小屋立て、あるは曲独楽または軽業なんどの興行はじまり、(中略) 人群集なしたること、九月下旬に及べるより、俗に神明のだらだら祭りと言ひて、幾日が本祭日といふことも知らざるなり。勿論当社は京橋以南第一の繁昌は、外に比類なき土地なり。故に平日つねに人群集す。殊に神明前町並びに日影町にかけて、浅草観世音前町の次は当所なるべし、社内に吹矢あり、矢を吹き付けて当てるや種々様々の人形及び鳥獸・樹木・妖怪の作り物、下より出で上より下がり、或いは竜宮の楼閣の戸左右に開くなどの細工、美をつくし巧みを極めしは、江戸に類なく当所一軒なり、この店表間口七、八間ありたち、(以下略)

【資料3】は文化年間に芝神明を訪れた僧侶の記録であり<sup>10)</sup>、【資料4】は、明治になっての江戸懐古の記録になるが、当時の様子を詳細に記した参考記録として評価される<sup>11)</sup>。それぞれが芝神明、もしくはその周辺地域を江戸有数の繁華な場所として記述していることに気付く。もとより、こうした見解はこれまでも紹介されているが、ここではもう一つ開帳に関する研究成果を紹介して芝地域の盛り場としての特色を考えてみたい。

開帳についていえば、比留間尚氏の論考「江戸の開帳」によると、居開帳は「浅草の149を筆頭にして芝の78がこれに次ぎ、本所・隅田川沿岸の順になるが、もう少し対象地域を広く見ると、浅草・本所・深川方面が開帳の最も盛んなところで、居開帳全体の38%を占めている。次に多いのが芝・三田・品川・川崎界隈の14・2%である。芝方面が比較的早くから開けていたのに対し、本所・深川方面は中期以降に盛り場として発展してきたことが知られよう。」とある<sup>12)</sup>。参考までに芝方面の開帳年代について表1にまとめてみた。一方、出開帳は居開帳同様、本所・深川・浅草方面が宿寺の集中地域であるが、再び比留間氏の研究によれば、居開帳が全体の38%に対し、出開帳が約7割(69・7%)の高率を示す。

このほかに操り芝居の興行についても比留間氏は言及しており、内閣文庫蔵「祠部職掌類輯」八の「開帳願差免留」に収められている「能芝居」「操芝居」の「差免留」(元禄15年[1702]から正徳3年[1713]まで)から、「弥之助踊芝居」、「操碁盤人形」、「浄瑠璃芝居」、「碁盤人形浄瑠璃操芝居」などの興行が芝神明では17件みられ、他の寺社よりも圧倒的に多いことを指摘している(表2参照)<sup>13)</sup>。近世後期の状況は不明だが、天保3年(1832)～同7年に刊行された寺門静軒著『江戸繁昌記』には芝神明について「一坐の劇場、数棚の観物、楊弓肆、次郎院、演史、落語史を連ねて、縦横社を囲む」と記し

表1 芝地域における開帳

		出開帳	居開帳
貞享2年	1685		1
元禄15年	1702		1
元禄16年	1703	1	3
宝永元年	1704		1
正徳4年	1714		2
享保7年	1722	2	
享保10年	1725	1	3
享保19年	1734		1
享保20年	1735		1
元文元年	1736		1
元文2年	1737		2
元文5年	1740		2
寛保2年	1742		1
延享元年	1744	1	2
延享3年	1746		3
延享4年	1747	2	1
寛延元年	1748		1
寛延2年	1749		2
寛延3年	1750		1
宝暦元年	1751		1
宝暦2年	1752		1
宝暦3年	1753		1
宝暦7年	1757	2	
宝暦8年	1758	1	1
宝暦9年	1759	1	
宝暦11年	1761		1
宝暦12年	1762	2	2
宝暦13年	1763	1	
明和元年	1764		1
明和3年	1766	1	
明和4年	1767		1
明和5年	1768		1
安永元年	1772		1
安永2年	1773	1	1
安永3年	1774	1	
安永4年	1775		2
安永6年	1777	2	
安永7年	1778	2	2

		出開帳	居開帳
安永8年	1779	1	
天明元年	1781		1
天明2年	1782	2	
天明3年	1783	2	
天明8年	1788		1
寛政5年	1793		1
寛政8年	1796		1
寛政9年	1797	1	1
享和元年	1801	1	
享和3年	1803	1	
文化元年	1804	1	
文化4年	1807	1	
文化5年	1808		1
文化6年	1809		1
文化7年	1810		1
文化9年	1811	1	
文化10年	1812		1
文化14年	1817	1	
文政4年	1821		1
文政5年	1822		1
文政10年	1827		1
天保2年	1831		1
天保4年	1833		2
天保6年	1835	1	
天保7年	1836		1
天保11年	1840		1
天保13年	1842		2
弘化元年	1844		1
弘化2年	1845		3
嘉永元年	1848		1
嘉永3年	1850		1
嘉永4年	1851		1
安政元年	1854		1
安政4年	1857		3
元治元年	1864		1
慶応2年	1866		1
慶応3年	1867		1
		34	78

合計

112

比留間尚「江戸開帳年表」(『江戸町人の研究』第二巻)より作成

表2 芝地域にみる芝居興行

	品川海徳寺	1	元禄15年	25
○	芝願了寺	4	宝永2年・4・28～(90日)、同3年・3・5～(90日)、同4年・3・2～(90日)、同4年(90日)	
○	芝神明	17	宝永2年・正・2～(90日)、同2年・6・19～(90日)、同2年・9・10～(140日)、同3年・2・朔～(90日)、同3年・5・朔～(90日)、同3年・8・朔～(90日)、同4年(1年間)、同4年・7・朔～12・晦、同5年・正～6、同6年～同7年・正、同7年・正月・～同7年・7、同7年～同8年・正、正徳元年～同年・6、同元年、同元年・9・6～12・6、同2年・2・10～5・10、同2年・6・朔～9・朔	
○	西窪八幡	1	宝永5年・6・5～9・16	
	芝飯倉善長寺	1	宝永7年・11・20～同8年・2・20	

比留間尚「江戸の開帳」(『江戸町人の研究』第二巻)より作成

ており、芝居小屋が存続していたことがわかる。<sup>14)</sup>

宮地芝居、開帳などがおこなわれ、芝地域は江戸の初期より盛り場の様相を帯びていたといえる。その後、盛り場の中心は両国・浅草地域への移行をみつつも、なおそれぞれの名所や寺社の門前の本屋などで賑わう地域であったことが分かる。

## おわりに

明治維新を迎え、芝地域は大きく変貌を遂げてゆく。新橋ステーションの建設とともに周辺には、西洋古道具、洋家具室内装飾などの店舗がみられ、愛宕山下ではかつて武家屋敷であった場所に商家が立ち並ぶようになる。増上寺境内は明治6年(1873)に芝公園となり、徳川家霊廟をはじめ、かつての寺社地が引き続き残されるものの、園内には会員制の高級料亭の紅葉館が建てられたりもしている。政治家・実業家・文人などの社交場として利用されるが、東京大空襲で焼失した後、その跡地には昭和33年(1958)に東京タワー(333メートル)が建設される。

愛宕山は愛宕公園となり、愛宕館の展望台、愛宕塔が建設され、江戸以来の景勝地として多くの人びとに親しまれた。大正14年(1925)には同地に東京放送局(JOAK、後の日本放送協会)の電波塔が建設される。

このような芝地域の移り変わりをふまえつつ、シンポジウムでは、より具体的な特色を明らかにするために、4名の報告者を迎えた。鈴木俊幸氏「絵は神明前」では、芝神明前に密集していた絵草紙屋について、多くの人びとが錦絵や書籍を求め、人びとで賑わう江戸有数の盛り場であったことを明らかにした。佐藤かつら氏の「芝神明と宮地芝居について」では、江戸の三大宮地芝居の一つで、正保2年(1645)より興行されていたという由緒を持つ芝神明前の宮地芝居について報告した。宮地芝居のみならず、芝神明の境内地がどのような場所であったのか盛り場としての特色について述べた。

佐藤紘司氏の「芝愛宕山の移りかわり」では、江戸名所の一つであった愛宕山が近代以降どのように

変容していったのかについて明らかにした。なかでも愛宕山に建設された塔、通称愛宕塔の設立からJOAK・東京放送局の設立までをみて、観光名所もしくはランドマークとしての特色について考察した。高山優氏の「芝公園と芝増上寺」では、近年の発掘調査によって明らかになった増上寺周辺地域、ひいては芝地域の特色について明らかにしている。

歴史学、国文学、考古学といった諸学問の立場から論じることにより、芝地域の特色を多角的に考察し、さらにパネルディスカッションで当館の市川寛明学芸員、米山勇研究員のコメントで問題点を明確にしながら、芝地域の盛り場としての特色について実りある成果を導き出すことを試みた。詳細は各稿を参照されたい。

## 註

- 1) 東京都江戸東京博物館 調査報告書第24集『両国地域の歴史と文化』(2011年3月)
- 2) なお、近年リニューアルした国立歴史民俗博物館の第3展示室(近世)では、江戸の盛り場として芝神明を取り上げている。
- 3) 『芝区誌』(東京市芝区役所、1938年)21頁～26頁。
- 4) 大日本地誌大系『御府内備考』第四卷(雄山閣出版)152頁。
- 5) 『大本山増上寺史』本文編(大本山増上寺、1999年)42頁～53頁。
- 6) 『芝大神宮誌』(宗教法人芝大神宮、2004年復刻版)7頁～13頁。
- 7) 陣内秀信『東京の空間人類学』(ちくま学芸文庫、1992年)134頁。
- 8) 吉見俊哉『都市のドラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』(弘文堂、1987年)22頁～28頁。
- 9) 竹内誠『江戸盛り場・考』(教育出版、2000年)33頁～34頁、206頁。
- 10) 『十方庵遊歴雑記』(江戸叢書刊行会編纂『江戸叢書』巻の四所収、1980年)
- 11) 『絵本江戸風俗往来』(東洋文庫、1965年)157頁～159頁。
- 12) 以下、開帳に関する研究は比留間尚「江戸の開帳」(『江戸町人の研究』第二巻、吉川弘文館、1973年)によった。
- 13) 比留間前掲書 447頁～453頁。
- 14) 『江戸繁昌記 柳橋新誌』新日本古典文学大系 100(岩波書店、1989年)93頁。